

京都光華女子大学
研究紀要 第45号 抜刷
平成19年12月5日 発行

保田與重郎『現代畸人傳』の構造可視化
—日本語文章の絵解き—

谷 口 敏 夫

保田與重郎『現代畸人傳』の構造可視化

—日本語文章の絵解き—

谷 口 敏 夫

1 はじめに



本論で扱った『現代畸人傳』は、評論家保田與重郎が昭和三十九年十月三十日付で新潮社から刊行した図書で、題字装幀は清水比庵*1とあり、昭和三十八年二月号から三十九年四月号にかけて雑誌「新潮」に掲載された。昭和戦前、戦後の保田の目にとまった「畸人」と思われる人たちの消息が描かれている。(写真は初版)

我が国戦後の異色人物傳ではあるが、著名人は少ない。保田によって描かれねば、ほとんど誰も知らないままに終わったであろう人たちが、頁をくるとに魅ってくる。たとえば作家今東光だと作品や人物を知る方も多いが、その母親となると、親戚や近辺の人たちの目にしか触れなかったことだろう。

この図書は別の視点からも貴重なものとなっている。保田は昭和21年以降筆を断っていた。中国から帰国したあとも奈良の櫻井に帰農したのだが、公職追放も受け、公的執筆活動は停止していた。しかし解除された後も、中央の雑誌などに書くこともなく、この連載が戦後二十年ぶりの初めてのまとまった著書となった。勿論戦後の風潮から、出版社、そして所謂文壇とも疎遠になっていたのだろうが、私はなにかしら、保田が書きたくなかったのではないだろうか

*1 岡山県出身の歌人、書家。戦前に日光（市）の町長を務めた。

と、想像している。それを検証したわけではないが、今回『現代畸人傳』を詳細に再読した上でそういう印象をうけた。つまり、保田が対象として興味を持ったことは、戦後の日本では主流ではなく、大方の興味を引くものではなかったように思えた。保田は、世の中から取り残された市井に生きる身近な「畸人」達に、人生の核のようなものを感知したのだと想像している。

想像を重ねたが、本論は想像を縷々述べるものではない。『現代畸人傳』のテキストを詳細に見ることによって、保田が当時興味を持った人物や事項を抽出することで、テキストに現れた「思想」をより鮮明にしておくことに目的がある。

書名から伴蒿蹊『近世畸人傳』を思い浮かべるが、本論ではそのことの比較対照はしていない。あくまで、昭和三十年代の保田の目に映った世界に限定して論を進めた。

また今回の調査研究の特徴として、多数の人物名についての扱いが慎重を要した。これは前々回に『日本浪漫派の時代』を調査した際と同じく、個々の登場人物をテキストから抽出し、これを名寄せする作業に時間を要した。今回はことのほか、無名の人が多く注意深くあつかった。

2 実験・調査の目的と方法



本論の目的は、『現代畸人傳』を、テキストの用語の頻度によって可視化し、保田の意図した記録・随想の構造を考察するためのものである。(写真は文庫版)

この目的を明確にするために、あらかじめ粗く選んだ用語集合から、事項名や人物名を抽出し異同をただした。

その準備の上で、用語間のクラスター分析をし、これを地図化した。地図上にあらわれたパターンをテキストにあたり、各章単位での小概念として確定し

た。つまり、図書全体を構成する小さな概念の相互の関連を把握することが、本論の目的である。こういった目的や方法論は、すでに一連の論考として発表してきた*²。

テキストは新学社、1999年『保田與重郎文庫16 現代畸人傳』とした。総頁が550であった。目次を以下に示す。

序 「月夜的美観について」	六 紅葉のいそぎ
涙河の辯	七 さまざまな歴史家たち
一 狂言綺語の論	八 行道有福観
二 置きみやげ擬作の説	九 われらが愛國運動
三 大師匠殺身成仁辯	十 われらが平和運動
四 修身の教へ	番外 天道好還の理
五 歴史の流れの底に	竝育竝行の理

3 文章地図

まずテキストから、これまでの論考で用いたKT2システムで粗くいろいろな用語を取り出した。これらに手を加えずに整理したのが、表1である。この表からテキストの持つ傾向、語彙、用字用法の全体像がつかめる。そこからより精緻な文章全体の地図を見ることで、テキストのパターンが自然に浮かび上がってくる。これらは従来通り変わらないことである。

3.1 用語の分類

本論では人名や事項名について、この表1であらかじめ概略を把握した上で、より精緻な名寄せ作業を行うことになる。表1から、テキストの特徴がいくつか見られたので次に詳述する。

* 2 谷口敏夫「保田與重郎『日本浪漫派の時代』の構造可視化」京都光華女子大学研究紀要、43 (2005)、pp23-65 (本稿での手法、ソフトウェアなどの詳説を含む)

(1) 人名の概略

この表1には頻度の高い用語が100件リストされている。この中で「人名」と明確にわかるものは、次の6用語である。()内数字は頻度数である。

{豊壺 (60)、三村先生 (48)、工藤君 (30)、岡先生 (27)、兵本君 (24)、普羅 (22)}

崎人傳と銘打ってはいるが人名は少ない。これは『日本浪漫派の時代』論考時と同じく、人名や事項名が各章に分散しているからこうなったのである。分散している中で、この6名が上位に現れているのは、保田にとって強い印象があった人物と想像できる。

表1 用語の頻度 (上位100件)

頻度	用語	頻度	用語	頻度	用語	頻度	用語
176	日本	48	精神	31	女性	23	生涯
173	國	48	三村先生	31	自然	23	信仰
124	家	47	上人	30	奈良	22	經驗
95	歴史	45	アメリカ	30	工藤君	22	様子
95	美	43	青年	29	文士	22	普羅
92	神	42	英雄	28	涙川	22	南朝
91	くらし	41	政治	28	表現	22	天台院
89	歌	41	人物	28	根底	22	支那
80	時代	41	小説	27	生命	22	近代
78	人間	40	觀念	27	岡先生	21	文藝
73	世界	39	傳統	27	永遠	21	武士
68	大和	39	子供	26	教育	21	小説家
65	東洋	38	刀自	26	平和	21	建物
60	豊壺	36	老人	26	道德	20	戦後
60	神話	36	不思議	26	中心	20	暴力
60	死	36	東京	26	眼	20	夫人
58	思想	36	商賣	25	大阪	20	田舎
56	土地	36	詩人	25	存在	20	庶民
56	天皇	35	大東亞戦争	25	西洋	20	作品
56	仕事	34	戦争	25	志	19	學問
55	文章	34	百姓	24	兵本君	19	浮世
51	生活	33	學	24	文明	19	仲間
49	文學	32	京都	24	作者	19	世間
49	日本人	32	記憶	24	感銘	19	親
48	明治	31	民族	23	文人	19	吉野山

また、表1中で「刀自(38)」と「天台院(22)」とがあるが、これは刀自がほぼ作家今東光の母親を指し、天台院は今東光が住職をした寺名である。よって、人名と被さる用語名と考えてもよい。

(2) 分類項目の概略

表1に表れた高頻度の用語を分類をした。それが表2である。分類の項目は七つにし、「その他」を加えた。各分類項目について以下に説明する。

・文明論 頻度総数1147

「文明論」という分類項目は結果としてとらえどころのない用語集合になったが、テキストが随想に近い内容なので、他の文学史や評伝とは異なり、突出した専門用語が現れなかった。しかし図書読後には、東洋と西洋と日本との対比関係が多く、それらを「日本、東洋、西洋」などの用語群で表現した。またアメリカ(45)と西洋(25)にも微妙な異なりがある。

本テキストは日本の畸人を描くに際し、諸国と日本文明の相違から、畸人を特徴付けている。よって「文明論」はこの傾向を表した用語群である。

・歴史 頻度総数669

従来、保田の歴史は文学と近接していた。歴史を文学ととらえる歴史観があった。このテキストでもそれは同様である。

ここでは歴史や文学の要素のうち、より抽象的な用語を選んだ。たとえば明治(48)という用語には、明治の精神として、維新政府、明治天皇、乃木將軍などが常に背景にあり、それらを包括した用語として「明治」がテキストに現れる。

・くらし 頻度総数606

「くらし」という分類項目は今回のテキストのために全く新しく考えた項目である。保田の思想家としての資質の一つに、日々の生活の仕方、生き方、仕

表2 用語の分類 頻度19以上、100用例、4103頻度

文明論		歴史		くらし		文学	
176	日本	95	歴史	95	美	89	歌
173	國	92	神	91	くらし	55	文章
124	家	80	時代	56	仕事	49	文學
78	人間	60	神話	51	生活	41	小説
73	世界	56	天皇	39	子供	36	詩人
65	東洋	48	明治	36	老人	29	文士
60	死	42	英雄	36	商賣	28	表現
58	思想	35	大東亞戦争	34	百姓	28	涙川
49	日本人	34	戦争	26	道德	24	作者
48	精神	32	記憶	23	生涯	23	文人
45	アメリカ	31	民族	23	信仰	21	文藝
40	觀念	22	南朝	20	庶民	21	小説家
39	傳統	22	近代	19	親	20	作品
28	根底	20	戦後	19	浮世	464	
25	西洋	669		19	仲間		
24	文明			19	世間		
22	支那			606			
20	暴力						
1147							

崎人		風景		教育と平和		その他	
60	豊壺	68	大和	43	青年	41	政治
48	三村先生	56	土地	33	學	36	不思議
47	上人	36	東京	31	女性	26	中心
41	人物	32	京都	27	生命	26	眼
38	刀自	31	自然	27	永遠	25	存在
30	工藤君	30	奈良	26	教育	24	感銘
27	岡先生	25	大阪	26	平和	22	經驗
24	兵本君	21	建物	25	志	22	様子
22	普羅	20	田舎	20	夫人	222	
22	天台院	19	吉野山	19	學問		
21	武士	338		277			
380							

事への取り組みの中で、彼が信じる美や文学という思想を述べることに特徴がある。それらは、道德 (26) に裏打ちされた商売 (36) や百姓 (34) の生き方であり、つまり、日々の「くらし」に彼の思想がある。

・文学 頻度総数464

歴史と文学については先述した。ここでの「文学」に含めた用語群はおもに、近代、現代文学での用語を中心にした。涙川（28）については、序章において古典文学や神話の中で「涙川」が特徴的に使われていたので、文学用語として選んだ。

・畸人 頻度総数380

保田が畸人として描いた明確な人物がここには6名入っている。それ以外に、上人（47）は主に今東光をさし、刀自（38）は今東光の母親を指す事例が多く、上人も刀自も特定人物を一意に指すわけではないが、本論での分類項目は概略的なものなのでここに納めた。なお、天台院（22）も今東光がある期間、住職となった寺院である。寺院を畸人にいれたのは、天台院を巡る顛末が「畸人」そのものだったからである。これは特例とする。

・風景 頻度総数338

保田は風景の中に重層した歴史を見る。そして歴史の中に風景を見る。この往還に保田独特の日本観が生まれ、このテキストでもその傾向が強い。たとえば吉野山（19）と記した時、奈良県の一地域をさすだけでなく、そこに歴史のあらゆる層が込められている。神武東遷、天武天皇時代の宮滝、義経、後醍醐天皇、南北朝時代と、時の流れと歴史が組み込まれている。こういった風景と歴史を表す用語をこの分類項目に入れた。

・教育と平和 頻度総数277

戦後初めての比較的大部なこの図書には、それまで公開されていなかった戦後二十年の保田の考えが明瞭に記されている。昭和39年はおおよそ戦後二十年という区切りで、敗戦後の人心をながめ、平和を祈念し、教育の大切さを語ったところがある。また、女性（31）と生命（27）をペアにして入れたのは、こういった教育の要点として、家庭教育の要に女性を語っているからである。

・その他 頻度総数222

このたび設定した分類項目に、配置することが難しい用語をここに納めた。

(3) 用語の傾向

表2の分類内容を図1の円グラフにした。この図1から本テキストでの用語頻度の傾向をまとめておく。

図1から本テキストの傾向は、文明論と歴史に裏打ちされた日々の暮らしの中の「畸人」という読み方ができる。

畸人（9%）の頻度が少ないのは、畸人が各章に分散していて、ほぼ中心となる6名だけを分類項目の用語群に入れたからである。しかし、これは「畸人」を描いた文学であることが自明なので、分析に影響はない。

他の著作にくらべて文学（11%）の割合が少ないことについては、保田の独特の「詩」観から導き出されるであろう。以下の引用では、日々の生活から遊

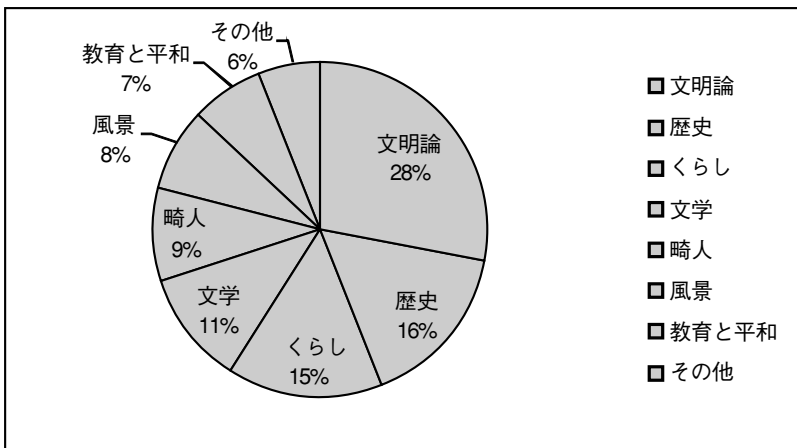


図1 『現代畸人傳』用語の傾向

離れたところにある美学を否定している。

都會に生れ都會に育つた人々が、自然の幽情など解し得ないのが當然となつた。秋のあはれといつてみても、ものあはれは秋こそまされなどいふ言葉を解釋しても、すべて抽象の世界のものである。所謂抽象藝術の生れるこんな場所を、私はたあいもないいつはりごととしてうけとる他はない。さびしい、憐れとおもはれる浅薄である。しかしさういふ場所が、美であり藝術であり、詩であると考へてゐる世間に對し、どんな論争が出来るといふか。
(六 紅葉のいそぎ)

つまり、このテキストが文学史や文芸評論ではないことと、保田の詩とか文学とは絵空事ではなく、現実の日々の生活の中から紡ぎ出されるものだから、「文学」に關係した明瞭な抽象語は少なくなると、推量した。

(4) 用語の地図化

図1では、用語の大分類から全体としての傾向を見た。この元データである表2の分類項目(用語群)から、それぞれのテキスト内位置情報を用いて地図にしたものが図2である。なお、◎は分類項目の識別マークとした。

図2では {◎文明論、◎歴史、◎暮らし、◎文学} の四つの分類項目が冒頭の「序」と、末尾の「番外」に特徴的な山を作っている。その間、◎くらしは各章を通して間断なく一定の頻度を保っている。これは基底になる分類項目と判断できる。

他方◎畸人は、一章、二章、そして五章に明確な山を持つ。これはそれぞれに対応する人物がいる。一章は今東光とその母、二章は菓子職人豊壺、五章は小学校の図工教諭三村先生である。畸人傳であるにもかかわらず、明白な山が都合三章だけに現れるのは、各章の中に数名の人物を配しているから、分散しているからである。

まとめてみると、この概略の地図(図2)からわかるのは、このテキストは、序章と番外で保田の思う文明観、歴史観、文学観を展開し、その間を日々の「◎くらし」の中での「◎畸人」を点描したといえる。

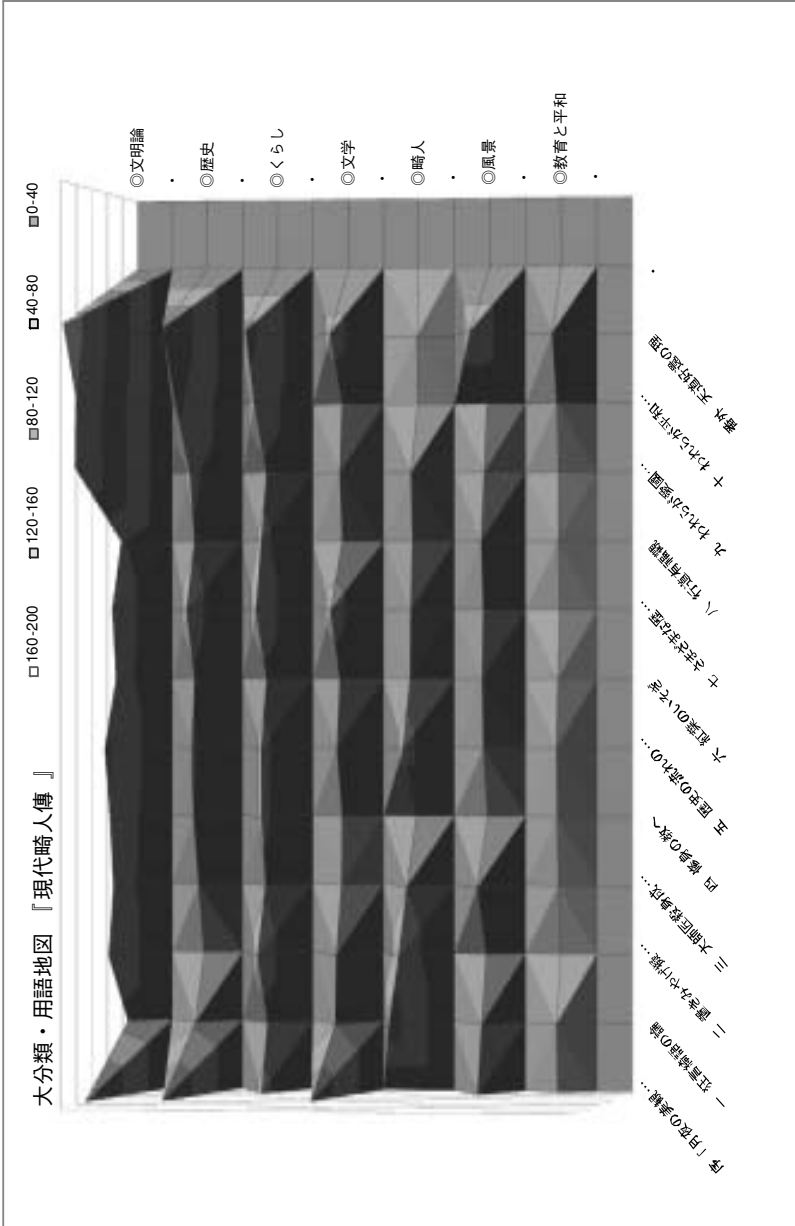


図2 「現代崎人傳」大分類・用語地図

以上を別の言葉で表すと、共時的には冒頭と末尾で保田は論を展開し、必要な概念を披瀝し、通時的には一貫した「くらし」の中で畸人を表したといえる。したがって畸人は序章と番外に少なく、その他の一章から十章で畸人を述べたといえる。

3.2 人物と事項の認定

今回の人物と事項抽出については、私自身に方法論上でいくつかのとまどいがあった。すなわち人物については、畸人以外の人物も多数登場し、保田もいちいち「畸人」の見出しを立てているわけではない。大凡、無名の人に「畸人」らしき人物が該当するわけだが、歴史上、文学史上相当に高名な人物も多数登場する。その人たちが、優れた人物であっても、畸人なのかそうではないのかは、一応の了解の中ではわかるのだが、本論においてはその区別や、区分原理を整理して公開することはしなかった。

つまりこのテキストは「畸人」を並べ上げた図書ではなく、日常の中でひっそりと志を保ち、そして美的な生活を送った名も知れない庶民を顕彰するために記されたと判断している。それはとりもなおさず、保田の思想の根幹にある「核」を、さまざまな人物の生き方の中で表現したともいえる。さらに、「美的な生活」と記したが、その美とはなんであるかは、保田固有のものであって、一般美学からは比較することが難しい。

また事項については、この図書が随想であり「論」の形式をとっていないことや、日々の「くらし」の中で人の生き方を表現していることから、いわゆる論争における抽象的概念用語や、その他、日常から遊離した思想的言辞の少ないことが特徴である。よって、これまでの文学史や文学論のように明確な用語を分別することが困難であった。そのことから、「事項」については表2で大分類した用語群を用い、平衡を保つため各分類項目の中で先頭10位までの用語を抽出し、それを表3にある「事項の用語」にまとめ、この6用語群をもって事項とした。

以上の人名と事項とは表3にまとめた。これは多様に頻出する用語を後述す

表3 人物・事項の名寄せ・用語群リスト（頻度10件以上）

↓△事項の用語△ [6件]	保井芳太郎 (18)	↓◎歴史人神◎[14件]
△文明論 (904)	内村鑑三 (16)	◎明治&昭和天皇 (34)
△歴史 (574)	奥西&高鳥 (15)	◎素戔鳴尊 (22)
△くらし (487)	日高昌克 (14)	◎神武天皇 (20)
△文学 (402)	萩原朔太郎 (12)	◎芭蕉 (18)
△風景 (338)	鐵齋 (11)	◎ゲーテ (16)
△教育と平和 (277)	山下將軍 (11)	◎月讀命 (15)
	辰巳長樂 (11)	◎和泉式部 (15)
↓現代人 [30件]	窪田雅章 (11)	◎木村重成 (13)
豊壺 (61)	早川須佐雄 (11)	◎日本武尊 (12)
三村行雄 (59)	南光仁三郎 (11)	◎大伴氏 (12)
刀自 (57:今東光の母を代表)	鈴木八重造 (10)	◎西鶴 (11)
工藤喜代治 (31)	齋藤劍石 (10)	◎トルストイ (11)
岡潔 (29)	菊池男爵 (10)	◎ベルツ (11)
前田普羅 (26)	五味康祐 (10)	◎高山彦九郎 (10)
兵本善矩 (25)	芝蘭子 (10)	
河上利治 (25)	中村元旦 (10)	
日野西子爵 (19)	杉本隆 (10)	
北畠男爵 (19)	棟方志功 (8)	
今東光 (18)		

る一定の名寄せによって、その頻度が10件以上のものを選んだ表である。ただし、棟方志功（8）については、頻度が8ではあるが、格別に保田の実人生に関係が深く、そしてまた「畸人」たるにふさわしい人物と考えた結果、試験的にリストに載せた。なお表1の大分類表と数値が異なるのは、ここでは字句を正し、正確な名寄せを行った事による。

(1) 人物・事項の名寄せについて

表3に表れた人物・事項の名寄せ内容は表4に詳細を記した。表3のうち、「◎歴史人神◎ [14件]」は、歴史的人物が多様にあることの参考とした。よって、表4及びそれ以降のテキスト分析には用いていない。これは「畸人」の範疇を狭めることで、本テキストの特徴を明確にしたいという意図による。

この表4にはメモのためにいくつかの記号をつけているので、今東光を事例として説明する。

表4 名寄せ内容

△文明論	くらし	{兵本善矩	奥西	南光氏一統
日本	仕事	兵本君	奥西君	南光仁三郎
國家	生活	兵本善矩君	奥西高鳥	南光邸
人間	子供	}	奥西高鳥兩君	仁三郎
世界	老人	{河上利治	奥西保君	}
東洋	商賣	河上先生	高鳥	{鈴木八重造
死	百姓	河上邸	高鳥君	鈴木先生
思想	道德	河上利治	高鳥賢司君	鈴木八重造
日本人	生涯	河上令嬢	高鳥氏	}
精神	}	彦齋先生	}	{齋藤劍石
}	△教育平和	彦齋夫人	{日高昌克	劍石
}	青年	利治少年	昌克	劍石君
△文学	學	利治先生	昌克翁	齋藤劍石君
歌	女性	利治大人	昌克先生	}
文章	生命	}	日高昌克	{菊池男爵
文學	永遠	{日野西子爵	日高先生遺稿	菊池
小説	教育	日野西家	}	菊池系譜
詩人	平和	日野西子爵	{萩原朔太郎	菊池最後
文士	志	日野西氏	萩原	菊池男爵
表現	夫人	日野西資忠君	萩原朔太郎	菊池男爵邸
涙川	學問	日野西侍從	萩原先生	菊池武夫
作者	}	}	}	菊池傳來
文人	{豐壺	{北島男爵	{鐵齋	}
}	豐壺	北島	鐵齋	{五味康祐
△歴史	豐壺君	北島治房男爵	鐵齋先生	五味君
歴史	}	北島親房卿	}	五味康祐君
神	{三村行雄	北島宅	山下將軍	五味先生
時代	三村	北島男	{辰巳長樂	}
神話	三村行雄	北島男爵	長樂翁	芝蘭子
天皇	三村先生	北島夫人	長樂翁夫人	{中村元旦
明治	}	北島老	長樂老人	元旦君
英雄	{刀自	{今東光	辰巳長樂翁	中村君
大東亞戰爭	大刀自	春聽	辰巳夫人	中村元旦君
戦争	刀自	春聽上人	}	}
記憶	刀自自身	東光	{窪田雅章	{杉本隆
}	老刀自	東光先生	窪田雅章君	杉本君
△風景	}	}	窪田雅章君	杉本隆君
大和	{工藤喜代治	{保井芳太郎	窪田君	}
土地	工藤喜代治君	保井翁	窪田君	{高山彦九郎
東京	工藤君	保井文庫	雅章	高山彦九郎
京都	}	保井芳太郎翁	雅章君	彦九郎
自然	{岡潔	故保井翁	}	彦九郎先生
奈良	岡潔先生	}	{早川須佐雄	}
大阪	岡先生	{内村鑑三	早川	{棟方志功
建物	}	内村鑑三	早川須佐雄君	棟方
田舎	{前田普羅	内村先生	早川孝太郎	棟方志功
吉野山	普羅	鑑三	}	志功畫伯
}	普羅翁	}	{南光仁三郎	}
△くらし	前田普羅翁	}	南光氏	}
美	}	{奥西&高鳥	}	}

{今東光	{は、代表人名、事項名、かつ名寄せの始まり
春聽	テキスト中の法名
春聽上人	敬称
東光	名前
東光先生	敬称
}	} は名寄せの終了マーク

表4にはいくつかの特例がある。これは各代表人名などが、テキストからは重要であるにも関わらず、いずれも各章各段落に局地的に使われ出現頻度が低く特徴が出ないことから、出現パターンを強調するために関係する用語も含めた。たとえば「河上利治」では、先祖や令嬢も含めた。「北畠男爵」では先祖の親房も含めた。同じく、「奥西&高鳥」では、二人は別人だがテキストからはまとまった両者の存在が大きな要素と認められるので、二名を合体して一つの用語群とした。

(2) 人物・事項の概説

次に名寄せした各人物について、頻度の高い7名（刀自を除く）について保田の文言を引用し概説する。対象は豊壺（61）、三村行雄（59）、工藤喜代治（31）、岡潔（29）、前田普羅（26）、兵本善矩（25）、河上利治（25）である。事項については表2の大分類の箇所の説明した。

豊壺（61件）

ホウコと読むのかどうかは不明。市井の菓子職人として登場する。「かりに豊壺と呼んでおく。實は俳名である。一字は本名からとつてゐる。」と、第二章「置みやげ擬作の説」に登場する。

豊壺さんの俳句は、大それた藝業や振舞でないから、俳句が藝術であるか無いかといふやうな阿呆な議論などへの風とも感じない。桂籬宮を見て、野原のまん中で山の

峠があつたり、手品つかひのやうなしくみがなかなかいいですな、と極めて簡単に感心する。永徳の襖を見ては、いい色合だと、子供の繪をほめる時と区別がない。

豊壺さんは大阪一の凄腕を持つ菓子職人だったらしいが、どの店に頼まれて^{すけ}助をしても、しばらくすると離れてしまう人だったらしい。豊壺さんに言わせると、ありきたりの素材を使って、失敗作のような菓子を、名だたる店が他店の数倍の価格で商売する。そういう仕儀に耐えられなくなって店を去る。いわゆる偏屈頑固職人と言ってしまうえば簡単なのだが、それだけでは名著『現代畸人傳』に残りはしなかっただろう。

にせものをにせものと口にしてあばくことも、値高いものを摘發することも、豊壺さんにとっては、商賣の邪魔といふことで、それはいけないことだと考へてゐるのである。さういふ商賣がよいことか、よくないことかといふやうな抽象問題はたつて考へない、ただ自分が仕事をした限りで、自分の仕事の思ひと商賣のやり方とは兩立しないことはよくわかつた。

三村行雄 (59件)

戦後の和歌山県で小学校の先生をしていた。当時和歌山県は日教組の勢力が強く、三村先生の教育観とは大きく異なっていた。三村先生は組合員たることを拒否し孤立していた。生徒達は全県そういう思想の中で教育を受けていた。客観的に振り返るなら、戦前の反動による、極端な左翼系思想が学校教育を席卷していた時代といえる。

三村先生は若い頃、休日の放課後に生徒から「川で泳いできてもよいですか」と問われ、「いいよ」と答えた。その生徒はその日、近所の川で溺死した。三村先生はその夜、文鎮を火であぶり自らの頬に押しつけ慟哭した。それは戒めというよりも、悲嘆に耐えなかったのだと、保田のテキストからは読み取れた。

三村先生は図工の教師だった。しかし生徒達の後日談によれば、三村先生が生徒たちに写生を勧めたのは、必ず自分たちが育てた花や木、自分たちが育て

た動物だったらしい。その生長を写生することに三村先生は意味を見いだしていたようである。

その三村先生が、晩年卒業生達と吉野の山に登り頂上で亡くなった。残された若者達は、手を尽くせるだけの卒業生に回状を回し、寄金を募った。四千名から合計四十万円の浄財を得た。一人あたり百円の平均だった。卒業生達は、その資金をもって和歌山の百貨店で三村行雄の回想展を行った。併せて遺稿集も作り配布した。一万部が瞬く間に無くなった。

保田によればこういうことができるのは、有名人でない限り、一種の宗教教団でしかできないことらしい。それを普通の青年達があっけなくやってしまった。卒業生達は、三村先生の教育の生涯に何を見たのだろうか。そしてなぜ百貨店を訪れた万をなす人たちが、一教員の死と生涯に感動したのであろうか。

畸人とは所謂奇人変人の風変わりな人物だけをさすのではないと思った。三村先生は、頬に残った火傷あとを人に問われると「若気のいたり」と、つぶやいた人らしいが、おそらく教育、仕事や人生に対する誠実さというものが、若い人たちの幼年期に深い感動、印象を残したのだろう。

工藤喜代治 (31件)

駅前の食堂から保田に突然電話があった。今から変な人が先生のお宅に行きますが、やむを得ず教えたので、お詫びするという趣旨だったらしい。

第三章「大師匠殺身成仁辯」に現れた工藤は、上野の美術学校で彫刻を学んだ人だ。

歸りぎは門を出てから道を歩きながらも、頭をこちらへむけたままで、大きい聲で何ども、先生さやうならとくりかへした。それは小學生の聲と振舞だった。近所の人々が数人おもてに出て彼の様子を見守つてゐた。彼は、兵隊のやうに脚を膝まで直角にあげて、兵隊の歩調をとる歩き方で、ぬかるみの水たまりを、どんとどんと、泥水をあげて歩いていった。それは今でもあざやかに印象に残つてゐる振舞だった。

たしかに変人に思える。そして、それに感心する保田こそが、もっとも畸人

傳にふさわしい人物かとも思った。

この工藤君が、拙宅に泊まつた翌朝に驚いたことは、夜具の蒲團をあげて、それをきれいにたたみあげ、つみ上げたのを見たときだつた。それは夜具をたたむといふやうな通常概念と異なつた形だつた。そのたたみ方と、つみ方の、整然とした美しさは、単純なものが単純な形で、緊張して生きてゐる形だつた。どこでも見られるやうに思へるもので、どこでも見たことのないものだつた。

こういった日常の振る舞いを持って工藤を畸人傳に残したのではない。保田は彼を芸術家として感動した。

岡潔 (29)

奈良女子大学の教授をつとめた数学者である。文化勲章を受章している。保田は岡に畸人である修辭を見せていないが、私は三十代に縁あって当時筑波大学の数学教授から岡潔について話を伺つたことがある。日常において相当な、世間的な意味で畸人変人の方のようだと得心した。また、当時TVで岡潔の対談を見ていた時、出されたコーヒーか紅茶に付いたミルクを入れず、そのまま小さなミルク入れのまま一息に飲まれたのをみて、驚いた記憶がある。数学者としての岡は、掛け値無く世界の数学史上に残る人である。私は大学生時代に、岡の『春宵十話』と『紫の火花』を熟読していた。それで上述のような私的感想を本論におさめた。

保田が数学に造詣ある思想家、評論家とは思わない。しかし、保田は岡の文学に対する姿勢を高く評価している。それは岡が文学史上の細かなことに知識があるとかないとか、一家言をもっているとか、文学論を書いたとかとは全く別の次元である。

「春宵十話」は、教育、人道、理想の問題から、人間のあるべきやうの一切を論じた書物であるが、ここで私の立場から一言云つておきたいことは、この二十年間に私の知つたもつとも高潔な、そして価値のある、さらに將來の問題をふくんだ、最高の文學

批評だといふことである。先生の思想とその意味の全般から見てそれほど重大なことではないが、云つておいて悪いことでないと思ふ。 (九 われらが愛國運動)

保田が岡潔を畸人列傳に納めたのは、勿論私が驚いたような岡の日常の振る舞いからではない。

岡先生の人がらと學問を二つ合せて示すやうな話がある。アルキメデスがわかつたと叫んで裸で風呂をとび出し、走つて歸つたのは、決してその発見が本當かどうか調べるためでない。発見の正しさに疑などを持つ餘地は全然なく、ただうれしさのあまりこをどりしてゐたのに違ひない。と岡先生は語られる。かういふのがまことの発見である。これは實にすばらしいことばである。近代になつてアンリ・ポアンカレーは、発見にいたるいきさつなどはこまごま書いてゐるくせに、肝心の喜びにはふれてゐない、このことを岡先生は、すでにポアンカレーの受けた佛蘭西の教育はかなり人工的になつてゐたとみるほかない、と斷じられる。

この引用には直接でないが、學問であれ社会であれ、教育であれ、論理の深層にある情緒、喜び、感動というものを上手に育てる方向に目を向けないと、人間の人間らしさが損なわれるという主調が流れている。

前田普羅 (26)

第六章「紅葉のいそぎ」の終盤に現れる。著名な俳人。普羅については、保田の語るままに引用するのがよいと考えた。

ある夜荻窪の雜華堂の茶の間で主人*³と向ひあつてゐた。主は、あなたは普羅さんが好きだらう、あの人は最後の俳人だつたね、と云つた。主は最後の俳人と云つたのである。そして短冊箱をいさぎよくひつくりかへして、ばらばらとくと、普羅さんの作が何枚か出てきた。その中に秋風の句*⁴の一枚があつた。それを手にして、目をこらして見入りつつ、何べんかくちずさんだ。これこそ普羅の絶句だ、としみじみ云つて、ためいきをついた。句の絶品を絶句といつたのである。主は泣いてゐるやうだつ

* 3 工房を「雜華堂(ぎっけどう)」と呼んでいた棟方志功を指すと思われる。

* 4 前田普羅「秋風の吹きくる方へ帰るなり」と思われる。

た。身につまされたものがあつたのであらう。

日常のちょっとした所作に人の思いが込められている。そして俳人ならば、言葉一つ一つへの気持ちの深さがある。次の宇陀と吉野の違いは、神話世界と南北朝世界との違いだろうか。

その日私は普羅さんのために榎^かの実を炒つた。上手に炒るのはなかなかむづかしいといふと、むづかしいことはない、ていねいにあくまで炒つてをればよいのだ。越中では餅をやくの、金網の上で三十六回うらおもてをかへすものだと云つた。しかし火のかげんはむづかしいだらうかと云つた。そしてこれはどこの榎かと問ふので、宇陀の榎といふと、普羅さんは、自分にとっては、これは吉野の榎だ、さう、吉野の榎の実だと云ふ。

普羅という晩年漂泊の俳人の中に保田は、己自身を戒める姿を見た。

私の氣持では吉野の榎でなければならないといつた普羅さんは、その吉野の榎の実を琴歌につくつた。それのつた冊子は、私に送つてこなかつたが、人に教へられた。その今様は、巷に道を説いてゐる人より吉野の榎の実を炒つてゐる人がなつかしい、といふ意味のものだつた。～略～普羅さんは、爐ばたにうづくまつて、埋火をかきおこして吉野の榎を炒つてゐる方が、激情のこぼを筆にのせてゐるよりよいのだといふことを私に教へようとしたのである。

兵本善矩 (25)

奈良県五條市の小説家。第七章「さまざまな歴史家たち」に登場する。

兵本君は大和の五條の方の舊い大家の出身だつたが、彼の一生は貧塞と落ちぶれて流離にくらした。しかし夫人や子供たちは尋常の世間にて、殊に夫人は人にまさつた女性だつた。彼を一種の性格破綻者だつたといへば簡単な解釋としてすむ。家族を棄てて、一切に無頓着にくらしてゐた。よき中昔なら、彼の業績言行は、たつとい人の中に入れられもしたかもしれない。

保田は兵本を小説の達人とする。達人となると、一般的な人士の振る舞いを超えた異様な相貌をあらわしてくる。保田が兵本の様子を記すところは段落が長く息を詰めて読むことになってしまう。保田は兵本を思い出し、その情景を一気に書き尽くそうとしている。兵本は保田を前にして、二時間も三時間も自分の書いた小説を読み聞かせる。保田も徐々にその世界に入り込み、時にはくそこをもう一度>と兵本に言う。兵本もくここの良さがわかりましたか。ここは何年もかかりました>と笑う。

この兵本という作家は、『現代畸人傳』にあって、ことのほか印象深い人物である。志賀直哉と兵本の間を画いた部分は、保田が言うように鬼気迫るところがあった。

志賀直哉氏が奈良の高畑にゐたころ、その弟子となつたといふのが本人の話だが、その関係と結末については彼から何もきいてゐない。當時兵本君は東大寺のある塔頭に食客として、この上なくだらしない生活をしてゐた。それが彼の身上なのだ。ある夜、酔うて東大寺南大門の石階の上で寝てゐた。その横をたまたま塔頭の僧と志賀氏がつれ立つて通つた。しんしんと寒い夜だつたので、これを見た僧は、可愛さうだからおこしてつれかへらうかといふと、志賀氏はすておけといつてそのまま通つた。さういふ話を本人からきいたことがある。ただ一つその人に関係した話である。兵本君はその時横たはつたままで二人の會話をきいてゐた。この話を彼は小説として語つた。その小説では誰の心理の分析もせず、まして事理を邪悪心で解することは絶えてなかつたが、その話からにじみ出る感じは、ゆきざりかりそめのものの冷たさの、鬼氣に迫つてきびしかつた。～略～人のこころの見えない何ものかを摘發してゐる、おそろしい小説の名手とその眼を私は感じたのである。私は奈良へ行つてもその現場を通ることは兵本君のこの小説を思ひ出して心の痛みに耐へない。

河上利治 (25)

第四章「修身の教へ」に剣術家として登場する。

一種の信仰的情緒の點で、所謂在野浪人のなかの異色と思つた。徳島圖書館の蒲池館長がたまたまその武術を實際に闘はすのを見て、講談本の描く武技實戦のリアリズムを疑はなかつたといつた。相手の獲物をさけて、一丈程後とびに飛び上つて庭石の上

に立ち、次の瞬間にはもうその相手に一撃を與へて、廊下の數間さきにつつ立つてみたさうである。相手は修験か何かの行者で、棒術の達人だつた。

河上利治は河上彦齋^{げんさい}の孫にあたるという。彦齋は肥後熊本藩の藩士で、幕末に佐久間象山を暗殺した。

4 クラスタ分析

クラスタ分析をつかって、表4にある人物・事項に関する用語集合の関連をみた。この手法^{*5}については従来行ってきたものである。図3により、いくつか明らかになったことを記す。

4.1 人物・事項のクラスタ分析

この図3（デンドログラム^{*6}）は各用語群の位置情報隣接度のクラスタ分析結果として、用語集合間の類似度を導き出している。これは4.2で後述する人物・事項地図が、用語の位置情報から、用語の出現パターンを二次元表示することに、本論では照応している。

その類似度とは、テキストの各用語間にどのくらいの隣接共起があるのか、どういう用語が文章の中で隣接して使われているのかという指標である。つまり、そこに意味的な処理はない。結果のデンドログラムに関してテキストにあたり、クラスタ^{*7}の意味を類推し、付与することになる。

従来の通り本論でのクラスタ分析の目的とは、あらかじめ用語の意味を勘案するものではなく、用語間共起の結果として、共起した用語は相互に意味上のなんらかの関連があるのかもしれないと推定することにある。その結果とし

* 5 谷口敏夫「保田與重郎『日本浪漫派の時代』の構造可視化」京都光華女子大学研究紀要、43（2005）、pp23-65

* 6 デンドログラムとは、樹形図と翻訳できる。

* 7 クラスタとは、デンドログラムに表れた、要素間の明瞭な「まとまり」

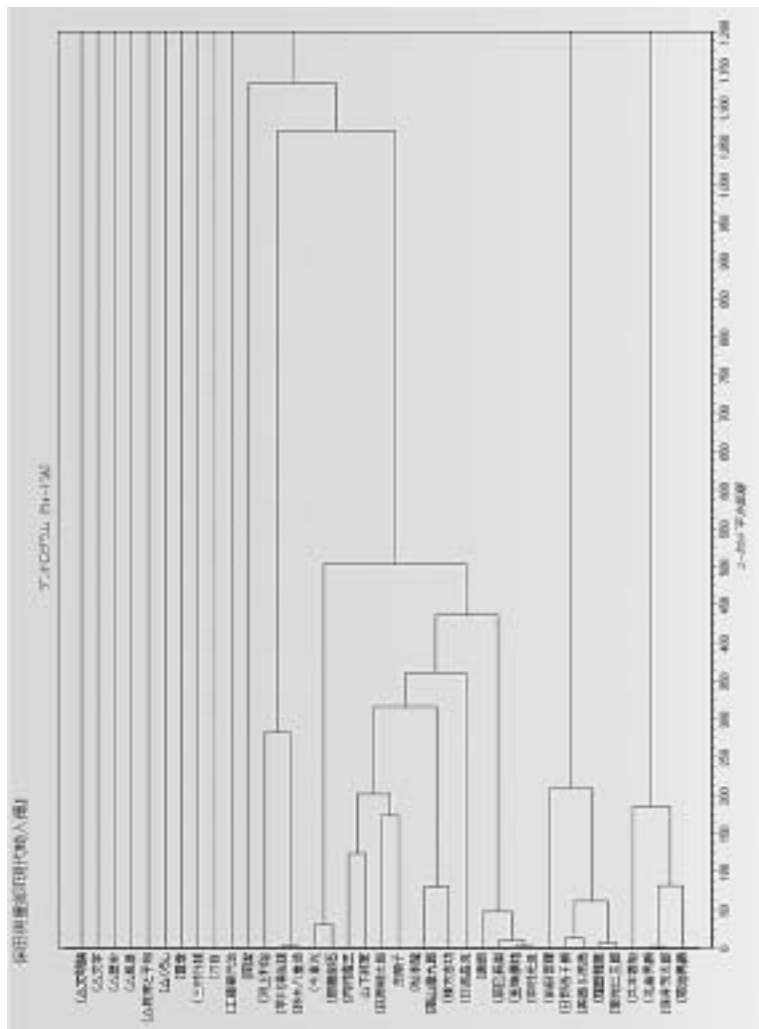


図 3 人物・事項のクラスター分析

て、分析で得られたクラスターをもってテキストにあたり、そのクラスターの有効性、妥当性を計ることにある。

しかしながら、この度はこの手法を用いた結果が初めて不首尾に終わった。それは、結果としてそれらしく現れたクラスターの多くが、テキストの意味や解釈を内包していなかった。つまり、クラスターを形成する用語間の意味関係が、単に位置的に近接しているだけで、明瞭な関連性や小概念を形成していなかったということにつきる。

従来、テキストのクラスター分析をデンドログラムとして表示する手法は、ユークリッド平方距離によるウォード法を用いてきた。これが最良だったからだ。今回は、思わしくない結果だったので、他の方法もとって見たが、やはり可視化についてはそれを超えなかった。このことから原因を他に考えてみた。

まず、人名については各人名の出現頻度が他のテキストに比較して相対的に少ない。たとえば著名な「志賀直哉」のようにテキスト内容に重要な位置を占める人名であっても、一度しか現れない。最大頻度を持つ無名の菓子職人「豊壺」でも頻度は61である。

人名の頻度が少ないだけでなく、「岡潔」に事例を見ると、彼は第九章「われらが愛國運動」に描かれ29頻度を持つが、岡潔は章の最初と最後に分かれて出現し、その間を別の数名の畸人描写に費やされている。

これらの現象はテキストに「随筆」という性格が強く、文学専門用語や特定人名について深く論考されている他の作品にくらべて、特徴的なパターンを出しにくかったのが原因と考えられる。

そういう現状の中で、図3のデンドログラムに現れたクラスターと、現実のテキストとの間に、意味があると思われるものを一つ選び解釈しておく。

クラスター・今東光&齋藤劍石

今東光が河内の天台院に住職として上がる時、当時（昭和26年頃）のことだから、荒れ寺は見知らぬ修験道の行者に占拠されていた。天台院は、比叡山の末寺として、後醍醐天皇時代の文観上人に関係が深くもとは名利だった。今春

聴（東光）はその生涯が破天荒で著名な高僧（兼作家）だったが、彼が天台院を奪還する際に活躍したのが、齋藤劍石という無名の青年だったようだ。

私は春聴上人^{*8}に向つて、上人が上方^{かみかた}に移られることは、上方の若者に活力を與へ、多くの僧俗の偽物を憎服し、上人の本懐となるにちがひないと、最大限のことばで極力すすめたのである。たまたまその頃、なき水巴翁^{*9}門下の齋藤劍石君が奈良にきてゐたのが、何に感じたか、修験者追出しの直接の任に當る決心をしたのである。～略～劍石君は度々拙宅へきてはその遅々と進まざるを嘆いてゐた。先立つものの無いのが最大因であつた。ところが偶然のことばのやりとりの結果として、先方の修験者が、よし春聴といふ悪僧が來るなら、護摩^{ごま}をたいて一步も門内に入れないといつたことから、劍石君が、それならばこちらは天台祕密の法を以て汝を調伏する、といふ話となり、日を定めて法力合戦をする約束をとりきめてきたといふのである。法力合戦とは一體どういふことだらうかと、拙宅へきて語る劍石君自身が本氣でなかつたことだが、法力合戦の實行を吹聴することだけは忘れなかつたところ、その當日、関係者一同すつかり忘れて了つたその當日に、大阪の報道関係者が、報道の道具類を天台院へかつぎ込むといふ騒ぎが山伏を驚愕させ、ここで俄に妥協を申出、若干の保證の話もついて、上人の晉山式とものごとは運び進んだ。上方とは、今でもかういふくらしぶりのところ、浮世の外といふより、浮世の廣さを思はせる、土俗のくらし豊かな土地である。

（一 狂言綺語の論）

このクラスターは図3の中程で二人が明瞭に現れ、かつテキストにあたっても内容が充実していて、用語の近接出現が意味のある可視化をもたらした一例である。

4.2 人物・事項地図からみた各章のまとめ

次に人物・事項地図（図4）は、クラスター分析した結果から得た用語群間の類似度による近接の程度を、等高線地図の用語並びに適用したものである。具体的には、図4の右端上端に表れる項目、△文明論、△文学、△歴史、……以下の並びは図3から得たものである。すなわち図4の横軸は文章の通時性に

*8 今東光（1898-1977）は、天台宗の大僧正、直木賞受賞作家。参議院議員。

*9 俳人渡辺水巴（すいは）と思われる。

ことであるまとまりが分かってくる。その際に共起した用語、すなわち共時的用語の集合をもって、「小概念」ととらえてみる。

以下、序章（月夜的美観、涙河の辯）と、番外（天道好還の理、竝育竝行の理）についてはテキストが随想であることから、パターンが明瞭でないので解釈を省略する。

一 狂言綺語の論

人物では、刀自が主人公である。ただし、この章での刀自と六章、八章での刀自とは別人である。一章での刀自は一般的な名詞扱いではなく、今東光の母親を指す。その刀自の息子として今東光、東光の近くにいた斉藤剣石、さらに別の文脈で前田普羅が現れる。ここでの刀自を畸人と言い切れるかどうかは難しい。保田の筆致では、今東光は、痴呆症になった母親として見ている。斉藤剣石はこの章にしか現れないが、当時の畸人として描かれている。

以上によって、第一章では今東光の天台院普山式をめぐる騒動と、不思議な刀自の話が語られる。

二 置きみやげ擬作の説

菓子職人「豊壺」が描かれる。若干棟方志功も現れるが、ほとんど豊壺だけの話になっている。そして事項としては「△くらし」、と重なっている。

豊壺は市井の菓子作り名人なのだから、彼の「△くらし」が重要な背景としてある。保田は、百姓が金銀を忌まわしく思い、真の儒者は貧乏といい、富貴を戒める。そういう観点から見て、儲けるという考えのほとんどない菓子職人の姿は、畸人なのであろう。

三 大師匠殺身成仁辯

この章では工藤喜代治が主人公になる。彼は美術学校で彫刻科を修めたが、まったく面識のない保田をたよって、米国への渡航費を工藤の親戚の炭坑主に頼んでくれという、途方もなく面食らう話だった。保田はその炭坑主とも工藤

ともまったく面識がなかった。しかし、そういう工藤を日ならずして自宅に泊める保田の畸人ぶりも窺えておもしろい。

四 修身の教へ

3.2 (2) で言及した河上利治と、一燈園*10の鈴木八重造*11が中心となるが、両者の挿話に関連は薄い。鈴木は無私無所有の当時一燈園にあっても実践が際だっていた。養豚などで無宿人を養える状態になっても、これ以上ないほどの檻樓小屋に住み、廃品、残飯を京都市内から回収し、再利用していたらしい。無所有、無収入の中でどのようにして、利を争わず生を全うするのか、その生き方であって、たしかに鈴木は畸人であった。

五 歴史の流れの底に

和歌山県の三村行雄教諭と、日高昌克とが主な人物である。三村はすでに記したが、日高昌克（医師、水墨画）は一時期三村の師であった。日高については保田の文言を引用する。

昌克翁の畫業は、佐藤先生の詩業、岡潔先生の學業と鼎立する、營代紀州産の國寶であると私は考へてきた。岡先生は近時漸く世間に喧傳し、今や人道の根底をなす思想として、多數の人に敬望されてゐる。しかし昌克翁の畫業は、生前も死後も、極めて少數の人に知られるだけである。東洋の水墨最後の、そして近代に於けるわが水墨の第一人者と私は考へた。私の贊成者は現在のアメリカにゐた。その一人は「昌克の作品に於て大切なことは、この作品の技巧でなく、技巧が奉仕してゐる目的である。即ちこれらの繪畫の背後には、孤高な、瞑想的な、そして博學な哲人的藝術家の態度が存在してゐる。」と書いてゐる。

(五 歴史の流れの底に)

六 紅葉のいそぎ

この章では6件の人名が連なっている。それは {前田普羅、日野西男爵、奥

*10 一燈園は京都市山科区にある財団法人（懺悔奉仕 光泉林）。宗教法人ではないが、実践と思想は宗教的な無私の集まりである。明治37年西田天香によって創始された伝統ある団体。

*11 一燈園のリーダーの一人だった。

西&高鳥、窪田雅章、南光仁三郎)である。それぞれのエピソードがある。印象深いのは俳人・前田普羅だった。晩年普羅が桜井市の保田実家を訪れた印象が紅葉のいそぎ、というタイトルに合致していた。

七 ささまざまな歴史家たち

無名に近い作家・兵本善矩が志賀直哉の世話になったり、歴史家・保井芳太郎のところで居候をしていたという、兵本の話が中心である。その保井翁は、実は生涯を神武天皇関連遺物遺跡の収集に執心した人で、それに関係して旧家の北畠男爵や、菊池男爵の話が続く。

兵本については、3.2 (2) で言及した東大寺の夜の志賀直哉との関係が鬼気迫る短編小説のように鮮烈だった。

八 行道有福観

ここでの印象深い人物は辰巳長楽翁だった。彼は吉野の老舗旅館櫻花壇の主人で、南朝鼻眞の古老だった。吉野に来た鐵齋のエピソードもよく覚えていた。櫻花壇は明治から現代に至るまで皇室や、著名人の常宿だったので、様々な文人墨客と知り合いだった。

その辰巳夫人が戦後の流行作家五味康祐のファンだった。そこで五味が登場し崎人ぶりを保田に見せ、そのそばに桜井市出身で、大相撲の故地・穴師での國技精神顯彰に尽力した中村元旦という人が登場した。

これを図3のデンドログラムで見ると、鐵齋 {長楽翁 {五味、中村}} という関係がわかる。

九 われらが愛國運動

この章では岡潔と、若干萩原朔太郎が登場する。岡潔は先述した通りである。岡と朔太郎とはエピソードが独立している。

十 われらが平和運動

この章では岡潔、内村鑑三、日野西男爵、窪田昌章らのエピソードがいくつかある。その中でも芝蘭子^{しらんし}という大阪堂島に金看板をあげた大相場師が、ある時すべてを捨てて俳人として生きる決心をし、京都嵯峨野の落柿舎庵主になって、保田と交流が始まったというエピソードが印象的だった。

5 まとめ

読後感として、一つ一つの章に現れる畸人は、一人で章を背負っている場合もあれば、数名の人たちのエピソードで組み立てられている章もある。図書全体の感想は、文明論と畸人傳とがうまく調和し、保田の作品の代表作の一つとして考えてよい。

しかし、その図書構造をこれまでのKT2による重要語や人名による可視化という方法論で分析した本論では、あらためてそのことの難しさについて知った。つまり、長編小説や編年体の文学史や、学術論文に近い文章に比較して、『現代畸人傳』は、ある種きままな構造を持った随想であることが可視化を難しくした原因だった。文学や歴史など、保田という思想家における専門用語^{テクニカルターム}、そして固有の人名が、一定以上の頻度を持たない本書では、これまでのような明確なパターンを見ることが困難であった。このことは、まだ曖昧模糊としているが、作者の連想について分析する新たな手法を導入する必要がある。

さて以下、本論全体のまとめを記しておく。

まず3章1において、テキスト『現代畸人傳』で用いられている事項・人名用語を粗く抽出し、おおよその傾向をみた。表1のように明瞭な事項が現れず、一般的な用語が上位を占めた。これはしかし、保田のコンテキストの中ではそれぞれが特徴ある意味を与えられているのだが、それを機械的な本論の手法では、明示することができなかつたにすぎない。

人名には、豊壺（菓子職人）、三村先生（図工の教諭）、工藤君（彫刻家）、岡先生（数学者）、兵本君（作家）、普羅（俳人）の6名が上位100件以内に現

れた。このうち、岡潔先生は文化勲章受章の著名人で、普羅は俳句の世界では文学史に残る人である。一般に、岡潔以外は無名の市井人としてよいだろう。このことから、本テキストでの畸人傳とは市井の人を対象に扱っているという傾向が明確になる。

図2ではこの用語群を手技で大分類(表2)し、その結果を地図化した。

この地図(図2)から、おおよそ「◎くらし」という用語群が各章に間断なく現れ、それに付随して畸人が各章に中心人物ないし、数名の群としてあることがわかる。とは言っても、これらのパターンは従来の実験に比べると明瞭さに欠け、随想というものを本論方法で扱う限界もよく現れている。

次に3章2では、この人物と事項とを詳細にしらべ、異同をみた。そうして事項・人名をあわせ、表4にある頻度の高い上位37件を調査対象とした。

4章1ではこの37件の用語群をクラスター分析したが、そこからは明瞭なクラスターが得られなかった。それはつまり、デンドログラム上では形があるのだが、実際にテキストにあたってみると、各クラスターの要素が意味的に密度のあるものが少なく、事例としては「クラスター・今東光&斉藤剣石」をあげ解釈を施したが、他のクラスターでは、確然としたものが少なかった。各章に現れた人名は、ほぼ独立した描写をされていると言ってよいだろう。ただし、萩原朔太郎や佐藤春夫は保田の師匠筋の作家としておりおりにその各畸人をつなぐ糸になっている。今回は、その糸が細い故に、意味を伴ったクラスターが得られなかったと結論した。

最後に4章2で、同じ37件の用語群を地図化し図4を得た。この図4をこれまでは、先行して得られたクラスターを元に分析してきたが、今回は図4単独で、各章に共時的に現れた人名を調査し分析し、その結果を記した。

ただし断っておくと、テキストに明らかな意味関係が無いからクラスターが生じなかった、という表現では誤解が生じるかもしれない。図3にみるように、いくつかのクラスターは図に現れている。これの意味は、著者保田の心に去来した人物が、ある連想に順って表現され、結果としてこういうデンドログラムを描いたという事実が大切だと考える。

よって図3で得られた各要素用語群の順番は、距離の近縁、類似度を内包しているのもので、その順番を図4の地図に使った。

最後に、本論で得た結論を記しておく。

- (1) 保田が描く畸人とは、市井人をさす。このことはテキスト精読の結果と、図2の大分類・用語地図とが一致する。
- (2) 随想という形式は、これまでの可視化方法論（KT2）では難しいことが分かった。
- (3) 各章に現れる人物の関係は、連想によるものと思量されるが、これを可視化する方法はまだ得ていない。連想とは、たとえば吉野の老舗旅館の古老（長楽翁）についてその畸人ぶりを縷々しるし、ところでその夫人は作家・五味康祐のファンである、とテキストが進む。そして五味に関してはまた別のエピソードとして語られる。このような連想の内実はテキストを読む限り非常にわかりやすく理解しやすいのだが、これまでの方法でそれを明示するのは困難である。
- (4) どの章が、どの人物が、私という一人の読者にとって印象深いものだったのか。これは本論の方法論からは外れるのだが、テキストの特徴として記しておく。

まず、序章の二つに保田の文人としての才能が的確に現れていた。月夜の美観で京都の月を語り、神話の中の月読尊へ導く。そこから兄弟神あるいは同一神とも思われる素戔鳴尊に筆が進み、この神の特徴として、世界を枯らすほど泣いたという、普通なら泣いたら涙で世界が水浸しになるというところを、泣いたから世界が枯らされるという不思議な話に行く。その答は、実は心中には涙川があって、世界の水が涙となってその涙川に注がれるという話になる。それらを語るに和泉式部を中心とした日本古典文芸の神髄に触れ、古典のおもしろさや特徴が心の底まで届く名文になっていた。

人物としては、それぞれがおもしろく興味深い人達だったが、一人を選ぶとしたなら、「八 行道有福観」に登場した長楽翁だった。現代も著名人の宿泊で名高い宿の主人（故人）が、戦後の宮様に、これからはそういう商売では立

ち行かなくなると論され、保田の前でむせび泣いたという、そういうイメージがくっきりと読者（私）の目に甦った。

以上、本論をまとめて端的に記すなら、随想のような構造を持つ文芸に対しては、作者の連想の軌跡が重要となり、別の方法論を用いなければ可視化することはできない。しかし、これまでの方法であっても、あわやかなパターンとして、人物や事項が立ち現れる事実は残った、となる。

謝辞

データの整理について、坂口昭代（京都光華女子大学）さんのご助力に感謝いたします。